西25km。高、 1172 m。船形連峰の前衛の山。中腹までバスが通じ、スキー場が開発されている。北西 1.5 kmに北泉ケ岳がある。』とある。

注(2) p.58の注(1)参照。

注(3) 「封内名蹟志」（佐藤信要）。

p. 403 の注(4)参照。

注(4) p.52の注(7)参照。

注(5) p. 118 の注(4)参照。

資料 封内風土記巻之 3（田辺希文）

大漢和辞典（諸橋轍次）

27. 古山貞とは如何なる人物か

問 小野清の名著「天文要覧」は、天文学者古山貞から手ほどきを受けたことが基礎となって成ったものだといわれます。古山貞とは如何なる人物ですか。

答 仙台出身の博学者小野清が、明治元年京都に赴く時、同郷の天文学者古山貞と同行し、毎夜旅館で天文学の手ほどきを受けて(1)います。このことが基礎となって、東西のあらゆる天文書を渉猟、以来50年にわたる研究成果をまとめ、大正 4 年〔1915〕に世に問うたのが「天文要覧」であります。ところで、この古山貞は仙台人でありながら、郷土に於ては殆ど知られておりません。わずかに「仙台人名大辞書」(2)（菊田定郷）に次のように記されている程度ですので、見落されてしまいます。

『古山清之丞　　勤王家。戊辰乱後当時の所謂勤王家を以て議事局(3)を組織し、以て藩士賞罰の権を掌る、古山清之丞また議員の一人なり、其終りを知らず。』これと同一人であるに拘らず、別人と誤り一項を立て『古山漸斎　　星学家。村田尺蠖子（明哲）と合著したる安政五年〔1858〕以降明治二年に至る仙台地方晴雨考の著あり。』(4)清之丞はその通称誠之丞の同音当字、漸齋はその号で、古山貞が明治初年上京して官途につき、遂に帰ることなく終ったとはいえ、郷土人からは忘れ去られた人だったようです。

古山貞は、天文学を以て明治新政府に出仕しましたが、「官員録」を調べますと、陸軍省の部に次のように彼の名が見られます。

『〔明治 8 年〕十等出仕 ミヤギ 古山　貞。〔明治 9 年〕十一等出仕　古山　貞。〔明治10－12年〕十四等出仕　古山　貞。〔明治13－16年〕十三等出仕　古山　貞。〔明治 17－19年〕十二等出仕

古山　貞』

古山貞は岡千仞と親交があった人なので、千仞の著作、書簡等の所々に古山貞について触れていますが、千仞と関係の深い古山貞について、最もまとまった記述が「鹿門岡千仞の生涯」（宇野量介）の書中にありますので、それによってその人物・事蹟をよく知ることができます。即ち、『この塾舎鹿門精舎、彼の書斎、草私史亭はいつ頃完成したか。仙台市民図書館蔵「蛍雪事業」巻十三所収の「序伊達氏譜系」に次の語があることから、元治元年〔1864〕の年末には完成したと見られる。……更には、この家屋を「枕流亭」とも呼んだらしいことが、同じ仙台市〔民〕図書館蔵の「蛍雪事業」巻七に「枕流亭記」があり、……数十名の塾生と、通学生五六十名が朝夕来学する。千仞一人では到底手がまわらぬ。近所に住む古山貞に教授を手伝ってもらうほど。拂暁から読誦の声が絶えることなしという繁昌ぶりであった。後には弟の徳輔も兄の手助けをして、塾生を指導することになる。さてこの助教の古山貞なる人物については、「仙台人名大辞書」によっても確かでない。日比谷図書館蔵「藏名山房雑著」中の「石鼓亭文集」中に「漸斎古山君墓誌銘」があって、その人を知るを得た。全文を写して、「仙台人名大辞書」の欠を補っておきたい。

漸斎古山君、明治二十年十二月八日を以て、病みて東京の僑居に卒す。白銀光取寺に礼葬す。後二年僚友義故、資を出し碑を建つ。友人岡千仞涙を枚〔ふく〕み之に銘す。曰く。君諱は貞、字は誠之、姓は古山氏、漸斎はその号なり。世籍仙台藩、父の諱は孫四、母は松川氏、少くして諸史に渉り、記憶に強く、もっとも算術に精し。天文生員と為り、刻苦研精、ついにその蘊奥を究む。特に命じて大番隊に列す。大政維新、朝廷諸藩をして星学に精なる者を貢せしむ。藩君を以て命に応ず。土御門氏に属して暦を修す。すでにして天文局廃せられ物を賜うて遣帰(注)す。たまたま増田大参事遷りて水沢県に令たり。縁属を以てこれに従ふ。七年陸軍省に出仕す。君人となり惇篤、よくその職に恪〔したが〕ひ、在官二十年未だかつて一日も懈怠〔げたい〕せず。その友朋に接する、つぶさに思意あり。性飲を嗜めども甚しからず、自ら倹にして、家に儋石〔たんせき〕（ごくわずか）の貯なし。子女嗷々〔ごうごう〕（さわがしい）これに居りて晏如〔あんじょ〕たり。葬日送る者百数、皆忠実の長者を喪うといふ。寿六十四才。配は刈田氏。四子あり、英策、雄輔、卯輔、余輔。長女は桂島氏に適〔ゆ〕き、次は高橋氏に適く。銘に曰く。

君生甲申　長我三三　生同郷里　長同酸鹹〔さんかん〕　四十年交　義同断金　将老同楽
泉石山村　何料此誓　忽成古今

(注)　明治三年五月十七日天文暦道御用掛に任命され、年給金百五十両を受けたことが太政類典第一編第三十巻（国立公文書館蔵）にある。なお土御門和丸は年給金三百両であった。職員は土御門以下三十名であった。三年八月二十五日天文暦道局は星学局と改称した。

文政七年〔1824〕甲申の生まれで、千仞より九才の長、四十年の交を結んだ。東京に殁したので、

仙台に知られること少なかったのであろう。なお古山貞については、「話記」〔在憶話記〕(5)においても、千仞は「天文の秀才を以て、組士より大番士となる。その母は松川宇仲の女、直輔の妹なり。わが家とは世交、一家同様なり。」とも述べている。松川宇仲は東磐井郡松川の人、医と儒を兼ねた。陸軍大将松川敏胤(6)の祖父である。又直輔は篤二とも称し、大槻平泉(7)に学び、志村五城(8)らに従遊し、千仞の父蔵治らと詩酒徴逐したという。千仞が右にわが家とは、世交ありといったゆえんである。……この年〔明治20年〕、千仞にとり身近かな人が、二人逝った。一人は岡文二であり、他は古山貞である。文二は千仞の兄台輔の二男である。二十六才を以て、十月三十日に没した。文二は家系には文治とあるが、仙台中学校を明治十一年七月十五日卒業した名簿には文二とある。のち札幌農学校に進んだ。明治十三年八月千仞の北海道に渡る時、文二は同行した。墓は仙台玄光庵にある。古山貞は、元治慶応の千仞の家塾に、教鞭をとった協力者である。千仞が塾を離れて仙北に売文の旅に出る時、よくその代講として留守を守ったのである。千仞上京後、古山も上京して、天文暦道御用掛に任じ、歳給金百五十両を給せられた（三年五月十七日）。
歿する時も東京であったから、「仙台人名大辞書」にも、その伝を正しく伝えない。千仞の新潟游歴中、十二月八日に歿したが、のち千仞はその墓誌を撰した。その全文は前に記しておいた。千仞より九才年長であった。松川氏（松川大将の氏）の縁によって、岡家とは父祖の代からの交際があったのである。越後の旅先で、この訃報を聞いた千仞の心中は察するに余りある。』

注(1)　p. 8の「4.小野清について」参照。

注(2)　p. 88の注(1)参照。

注(3)　明治2年「仙台騒擾」〔せんだいそうじょう。p. 107の注(1)参照〕があってから、藩は4月21日、片平丁の松ノ井邸に「議事局」を設置した。メンバーはいずれも勤王派に属し、論功行賞に関する諮問を中心として終戦後の処理、案件の諮問に応じさせた。議事長桜田良佐、議事長副石沢俊平・三好五郎、議員桜田敬助〔良佐の子〕・男沢陳平・武田文吉・古山誠之丞・岡敬輔〔千仞〕・佐沢良平・根来源之進・山岸修平・鈴木大亮・鷲尾右源太・氏家武之助・堀籠潔介・菅原龍吉・常磐新九郎〔田村顕允〕・十文字龍介。

注(4)　天文家。通称善次郎、尺蠖子と号す。世々割烹を以て仕えた家。明哲は天文暦数の学に精通し、嘉永4年〔1851〕大番士に挙げられ掌天学師となる。安政3年〔1856〕寒風沢において、洋式軍艦を造るに当り明哲をも参画させた、翌4年〔1857〕竣功の開成丸である。試運転記「ふなわたり日記」〔写本1巻、仙台市民図書館蔵〕がある。また、文久2年〔1862〕北辺千島諸島を調査測量し、その功労を賞された。著昔物語1巻など。明治11年11月26日歿、63歳、仙台東九番丁報思寺に葬る。

注(5)　「鹿門岡千仞の生涯」（宇野量介）に次の記事がある。

『在憶話記の口述　〔明治40年〕頽齢七十五歳、知友を失うにつけ、過ぎ来し方を顧みる時、出府以来の幾変遷、走馬灯の如く胸中を往来するものがあった。たまたま、子

等の希望によって、思い出を語ることとなる。十一月より一年にわたって、子等を前に、追憶の声を発するのである。その結果を筆写して整理したのが「在憶話記」である。在憶話記のはじめの「小引」において、千仞は自ら記していう。

（原漢文）

「余は今年七十五なり。手顫(ふる)えて正書する能はず。脚は酸(いた)み、仗に扶けられて歩む。衰羸〔すいるい。衰え弱る〕かくの如し。余が命、よく幾許ぞや。次男本枝、幼にして姪〔てつ〕易直の後の嗣たり。このごろ長じて京都大学に入り、電学を修めて、院内鉱山に電機を創め、今足尾銅山に操業す。その少より養を違にすること殆んど二十年なるを以て、書して兄百世、弟碩人〔おおと〕と謀って、乃翁(ダイ)の少時茗讕〔昌平黌〕に学び、壮年京摂の間に游び、四方の浪有志と国事を議して奔走日夜、その帰るや、藩学の容るる所とならず、且つ時事を輙論〔ちょうろん。専ら論ずる〕するを以て、用事〔藩の当局〕の忌む所となり、同盟の軍起るや此を以て縲紲〔るいせつ、牢獄につながれること〕せられ、幸にして性命を全うしたるの概略を筆記して、以て家に伝へんとす。

顧みるに、余が平昔の故旧はみな泉下なり。ただ河野荃汀〔せんてい〕は特に姻家たるのみならず、実に五十年匪他〔ひた。匪は非に通ず〕の交あり。田辺実明は、十六七より余に師事し、喪乱の間に相従ひ、今澪堤〔ぼくてい。澪は墨田川〕に隠居す。是に於て、長児百世は荃翁に請ひ、毎月実明の幽楼に会し、游学以来、喪乱前後に、閲歴し及び見聞する所、胸臆の間に往来して、忘れんと欲するも得ざるものを話さしめ、三人側より筆記し、荃翁更に行文を潤飾し、月に1冊となし、三子及び姪〔てつ〕濯〔あらう〕に回示せんとす。そもそも余はほぼ学業を以て自立し、処世迂疎にして、為す所なく、浪游売文以て生活するに至りては、甘んじて当世の大人鉅公〔きょこう。その道にすぐれている人。すぐれていて名高い人〕の笑ふ所となる。ただ少にして当世の名流と游び、帰りて喪乱の間に処しては、立身の本来、甚しくは人に譲らず。

いまこの零細の冊子を以て、諸子に付す。箆底〔ろくてい。箆は竹で編んだ高めの箱〕に秘し、以て溘然〔忽然。突然〕長溟〔ちょうめい。溟は暗い。瞑に通じ、眠る。長溟は死〕の後を待って、時に出して人に示さば、或は満贏〔まんえい。贏は満ちる。余る。みちあふれる〕の黄金に勝るものあらん。ここに引と為す。

明治丁未〔ひのとひつじ。40年〕十一月中浣〔ちゅうかん。中旬。上旬・下旬は上浣・下浣〕

以上によって、「在臆話記」の由来するところを知ることができる。千仞もまた胸中を十二分に吐露したであろう。すなわち、千仞一個の自叙伝としてのみならず、当時の書生一般ならびに幕末風雲に処した仙台藩の大勢をも知ることができる。今にしてなお知られること、少きを遺憾とするのである。もし西南諸藩ならば、すでに早く出版印行

されていたであろうに、なおそのことなきは、返す返す遺憾とせざるを得ない。いまこの伝を草するに当っても〔昭和50年〕、引用するところは極めて小部分に過ぎないことも、著者自ら悔んでいる。』同書巻末の「岡千仞年譜」の内、明治41年の項に『十二月、「在臆話記」十二巻成りて、河野荃汀これに序を加える。』とある。

その後「在臆話記」は、昭和55年「随筆百花苑」全15巻の内第1－2巻に活字化収録されて、東京中央公論社から発行された。

注(6) 伊達家の家臣松川安輔の第1子として安政6年〔1859〕11月9日、仙台土樋に生れた。幼名匡輔、字は子恭、仙南と号した。幼にして養賢堂に学び、神童と称せられた。鹿門精舎・麟経堂〔片平丁小学校の前身〕に於て岡千仞の教えを受け、上京して千仞の家塾猷緩堂〔ゆうすいどう〕に学び、慶応義塾に入り、明治12年陸軍士官学校に入った。卒業して歩兵少尉に任官、広島歩兵第11聯隊付となり、同18年陸軍大学に入り、翌年中尉に進級、同20年陸大卒業時、成績優秀を以て恩賜の望遠鏡を授けられた。23年大尉となりドイツに留学、28年帰朝して第2軍参謀として日清戦争に出征、歩兵少佐に進み大本営付に転じ、5月台湾鎮定に転戦した。32年歩兵中佐に進みドイツ公使館付となり、その後参謀本部の部長、東部都督府参謀長に兼補され、37年日露戦争が起ると大本営参謀から満洲軍参謀に転じ、各地の作戦を指導し、奉天決戦に心血を傾注した。その勝因は一に松川参謀の知謀によるといわれた。同41年12月歩兵第6旅団長、同44年9月歩兵第2旅団長、同45年2月陸軍中将に昇進、第10師団長（姫路）、大正3年8月第16師団長（京都）、同5年8月東京衛戍総督、翌年8月朝鮮軍司令官、同7年大将に進級軍事参議官に補せられた。同12年4月予備役となり、14年4月後備役に編入された。以後、仙台市土樋の自邸で悠々自適の生活を送った。漢学の造詣きわめて深く、すぐれた漢詩文を残している。昭和3年3月7日歿、70歳、東九番丁報恩寺に葬る。

注(7) p.18の注(4)参照

注(8) 儒者。諱は実因〔さねより〕、一名士轍、字は子環、通称勘右衛門、東華と号し、後に五城とした。江刺郡羽黒堂村中山の人、岩谷堂の伊達右近の側近に仕え、博学文才を以て聞えた。大番士に抜擢され諸職を歴任した。博覧強記、詩文抜群、学徳卓越、当時及ぶ者なく、世人老先生と称して尊敬し、一藩の子弟皆感化を受けたという。真に一世の大儒とされる。天保3年〔1832〕5月18日歿、87歳、仙台新坂通永昌寺に葬る。その次弟志村東嶼〔とうしょ〕・末弟志村弘強〔ひろゆき。号、石溪〕いずれも儒者として有名である。五城に子なく弘強がその跡を継いだ。

資料 鹿門岡千仞の生涯（宇野量介）